

～倅せの土台をつくる～

ftlビジネス・スクールは、働く喜びを感じられる支援を目指します。

=====

関係者の皆様

このメールは、ご挨拶させていただいた方向けに発信させていただいております。

=====

1. 新規利用者募集枠
2. 支援ノートNo.104『支援者養成研修への提案 3』
3. 近況
4. メディア関係案内
5. 研修・講演

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

1. 新規利用者募集枠

- ◆ 就労移行支援 ○ 余裕あり
- ◆ 就労継続支援B型 × お問い合わせください
- ◆ 生活介護 × なし
- ◆ 就労定着支援 △ ftlの事業所を通過した方のみ利用可
- ◆ 計画相談支援 × ftlの事業所を利用する方以外の受入は中止

2. 支援ノートNo.104『支援者養成研修への提案 3』

前回は、多くの支援者が受講しているであろう、都道府県主催の強度行動障害支援者養成研修について、その内容を検討する連載の第2回目でした。実際に研修で使われた『特性確認シート』の内容を読み、その中における視点の第一にあげられている『社会性』の部分を考察しました。前回、前々回の文章については、バックナンバーとしてホームページ上に残っていますので、まだお読みになっていない方は、どうぞお読みください。それを踏まえて、以下に第3回目の文章を書き始めます。

『特性確認シート』の概要説明については、前回書いたので、今回は繰り返しません。今回は、大項目4つのうち第一にあがっている『社会性』について、研修で教えられる傾向と対策をみて、意見を書いてみました。今回は、大項目の第二にあげられている『コミュニケーション』について考えてみたいと思います。

研修では、コミュニケーションの課題として、その中項目が3つあげられています。次の通りです。①理解が難しい。②発信が難しい。③やりとりが難しい。今回は、この難しいシリーズについて、ひとつずつ確認していきます。念のため最初に書いておきますが、ここで当該研修講師が言う「難しい」の主語は、強度行動障害ないしは自閉症とされる人になっています。つまり、支援者や講師が難しいと音を上げているわけではありません。ここがまず第一の間違いなのですが、先を急ぐので、これはスルーします。

とにかく支援者は、コミュニケーションの課題について、①②③のように理解しており、

それに基づいて、この研修を受講する支援者たちに講義をしているということをイメージしてください。

それでは、各論に入ります。

①理解が難しい

シートによると、理解が難しいことの原因が3つほどあげられており、「話し言葉の理解が難しい」「一度にたくさんのことを理解するのが難しい」「抽象的であいまいな表現の理解が難しい」とされています。また、このことへの対策（支援のアイデア）については、「本人が理解できる見える情報（文章、単語、絵、写真、シンボル、具体物など）で伝える」とされています。つまり、視覚化に焦点を絞って対策せよとされていることがわかります。

この説明を聞いていると、「とにかく彼らは言葉を理解するのが難しい。これは、中核的な障害に違いない」と、そのように説得されているような感覚に陥ります。言語概念が育っていない。それ故に、普通に話し言葉で情報を与えられても、それを受信する段階で混乱してしまうということは、確かにあるでしょう。これは、マイケル・ラターらが提唱した、『脳器質障害による言語障害説』から来ているものと推察します。ただし、このような状態像が障害になるのは、相当ロジカルな議論をしているときに限った話ではないでしょうか。実際、僕らが普通に彼らと一緒に過ごし、コミュニケーションをとっているときには、多少は障壁になるものの、極端に高い障壁にはなりません。平均発達の人であっても、対面でのコミュニケーションというものは、メッセージ全体の印象を100%とした場合に、言語内容の占める割合は7%、音声と音質の占める割合は38%、表情としぐさの占める割合は55%、という法則（Mehrabian,1968）から逃れられないとされています。その意味で、コミュニケーションの本質をコードされた意味としての言語（全体の7%）に求めるのはどうかと思います。これが言語面の発達に遅れがある人の場合だと、彼らは最初から言語に依存しないコミュニケーションを主軸にしています。ある程度慣れた援助者であれば、彼らに対して語りかけるときは、自然と、身振り手振り、音調、表情などを豊かにし、絵、実物を使うなどの工夫をしているものです。この工夫をしない人というのは、よほど頭の固い人であり、そもそも援助者の適正として合っているのかどうかを疑います。そういう意味で、「話し言葉の理解」について、わざわざ「難しい！」と大発見のようにしてシートに書き込まれても困ります。難しいのが普通だからです。

もともと、「生きたことば」というものは、中性的記号列が運ぶ意味（形式的意味）と生物学的音声系列が運ぶ意味（情動的意味）をあわせ持って発せられます。受け取る側も、言語記号の持つ形式的な意味だけでなく、相手の表情、身振り手振り、音調などの情動的意味を含めて解説します。記号性（コードされた意味）だけが行き来するのではなく、記号性を含み込んだ生物学的情報が行き来しているのです。確かに、自閉症であるということは、語用論的な障害を大なり小なり抱えて生きる確立が高いと言えます。しかし、このラター説を自閉症の中核障害として考えている人など、今時いないと思います。

僕らの事業所には、大学を卒業してから入ってくるひともいます。当然彼らは、日本語文法に則った言葉を使ってコミュニケーションをとっています。同時に、語用論的な障害もあります。しかし、それが社会参加への障壁における主たる要因になっていることはあ

りません。やり取りを積み重ねると、それなりに学習して、曲がりなりにも大きな障壁にならない程度にまで克服していきます。それよりも、彼らは情緒的な響き合いのほうを重視しています。論理は伝わらなくても情緒はやたらと伝わる（伝わってしまう）ものです。「念ずれば通ず」というのは一般的な話だけれども、広義に言うところの「発達に遅れのある人（自閉症もアスペルガー症候群も含む）」ほど、この傾向が強いというのが事実に近いでしょう。実際、現場に立つと、わかっていないようでわかっている彼らにびっくりさせられることは多々あります。就職していく際に「世の中の役に立つ仕事をしたいと思います」などとスットンキョウな声で言われると、いつの間にそんな大事な観念を取り込んだらうかと、涙が出そうになるのです。ましてや、「強度行動障害になりやすい」と研修で説明されている「重度・最重度の知的障害があったり、自閉症の特徴が強い」人となると、この傾向はなおさら強くなります。

また、発達という視点から考えると、幼児がそうであるように、初期的には本人が理解できる見える情報（視覚的ツール＝幼児型の記憶形式を賦活させる道具）を使う時期があったとしても、どこかで成人型の言語へとジャンプする可能性を孕む大きな変化期があり、そのときは、「抽象的であいまいな表現」を彼なりに使えるようになる機会となり得ます。援助者は、そういった機会と出逢うことに備え、これを逃さないようにしなければいけません。ところが、実際にこの研修を受けた多くの支援者たちというのは、いつまでも幼児型の記憶を頼りにした関わりから抜け出せず、ポロポロになった絵カードや写真カードとスケジュールボードをこだわりのように使い続けていることが多いと思うのは、僕だけでしょうか。

繰り返しになりますが、この研修においては『脳器質障害による言語障害』を取り立てて強調しすぎているように見えます。そして、そのことが、社会に融合していく上でより大切なスキルである情緒的な交流の価値を貶めることにつながっているのではないかと、僕は心配しています。

また、「一度にたくさんのかんことを理解するのが難しい」ということへの支援アイデアについても、同じく「視覚的なツール」や「理解できる見える情報で伝える」というところを強調しているのも気になります。情報がわかりやすく視覚化されていないからという理由で理解するのが難しいのであれば、それは支援者がビギナーレベルのスキルすら持ち合わせていないから相手を混乱させていることの証左であり、それをもって相手に強度行動障害のレッテルを貼るのは、あまりにも無責任ではないかと思うのです。たくさんのかんことを理解するというのが、どの位たくさんのかんことなのかはわかりませんが、本当に彼らの理解能力が最上位の課題なのでしょうか。実は、支援者との信頼関係がないから、理解するまでに至らないのだという風に考えるのは不自然なことでしょうか。僕は、理解が問題なのではなく、支援者への信頼が問題なのだと思います。

何よりも、この『支援者養成研修』の問題は、支援者が相手から信頼されるような関係を相手との間に築くためのスキルについて、何一つ語られていません。これでは、問題解決の糸口すら見つけられません。それでは、援助者が相手から信頼してもらおうに至るプロセスとは、どういうものなのでしょうか。

援助者が相手との間に信頼されるような関係を築くためには、何らかの機会を生かして相手と共同作業を経験する必要があります。そのときに援助者として求められるスキルは、次の一文が過不足なく教えてくれるでしょう。

「やってみせ、言って聞かせて、させてみせ、ほめてやらねば、人は動かじ」

有名な、山本五十六の言葉です。僕は、この一文の中で、一番最初に来る「やってみせ」というところがとても大事だと思っています。同時に、このことについて多くの支援者が軽んじていることが大変気になります。ふたことめには「視覚優位」だと大騒ぎしている割には、なぜやってみせないのだろうかと思議になります。例えば、仕事を教えるにしても、どれほどの支援者が真剣に「やってみせ」ているのでしょうか。僕が授産施設や企業内作業所などの現場で彼らと一緒に仕事をしていたころ、僕から彼らに任せる作業については、必ず自分がその作業をやり、セミプロだと言えるくらいに体得し、その上で、彼らにやってみせ、次によりやく手取り足取り教えるという手順を踏んでいました。そうしないと、何か相手の尊厳を傷つけているような気がしてならなかったからです。自分が教えられる立場の人間だったらどうでしょうか。真剣にやってみせもしない人に教えられたとして、それを信用できるでしょうか。僕なら、そんな奴のことは信用できないと思います。だから、自分が彼らに指示してやってもらう作業については、いざとなったら、自分自身が代わりに全部やれる自信がつくまで、自分自身で作業してみたのです。その上で、彼らとの共同作業であることを意識して、これをやってみせていると、「一度にたくさんのこと」が伝わります。単なる作業手順だけでなく、作業そのものの意味とか、働く意味とか、価値とか、仕事を通して感じ取ってもらいたい思いなど、そういうものまで含めて伝わっていくのがわかります。仕事（作業）にはリズムというものがあります。そのリズムをまるごと見せて、感じてもらうようにすると、単なる作業手順以外の多くのこと～実は神髄～が伝わるものです。

仕事を通して社会参加するための援助においては、作業手順を覚えてもらうことを目的にはしません。その作業は方便であり、神髄は社会と融合する感覚や一緒に働く仲間との目的共有感です。また、これは自尊心の低下を防ぐ役割を果たします。この目的に沿うためには、まずは僕という存在を感じてもらう必要があります。多くの人とつながっていく絆の細い細い1本目をどうにかして結ぶのです。

また、これは共同作業ですから、相互扶助の味わいがあります。たまたま教える側であった僕が、上記のように教えることを通じて、教えられることも多いのです。その過程には、互いに何らかの構造を作り上げた感覚を残します。こういった体験を積み重ねて、援助者のスキルは上がっていきます。そのことに触れない支援者養成研修というものがどれだけの意味をもつのか、僕には疑問です。

②発信が難しい

今度はoutputの過程について「難しい」と説明されています。内容は「話し言葉で伝えることが難しい」「どのようにして伝えたらいいかわからない」「誰に伝えていいかわからない」の3つがあげられています。そして、支援のアイデアとしてあげられているのは、「本人が発信しやすいツールを（文章、単語、絵、写真、シンボル、具体物など）提供する」となっています。読む限りでは、本人に扱えるツールを物理的に用意して与えると、

発信が容易になるということのようです。

しかし、同研修における別の説明では、気持ちを行動で表した結果が「強度行動障害」と呼ばれる状態像だとされています。それはこれまで述べてきた通り、主にinput過程での「難しい」が積みかさなるところから始まりますが、その結果として彼らは不安や緊張を感じ、そこから逃れたい、伝えたい、気づいてほしい、と思うのだけれども、その方法がわからないから問題行動で表す（outputする）のだとされています。同じ研修で言われていることでも、前者と後者とでは、ずいぶんと様相が違うのですが、前者は強度行動障害というレッテルを貼られる状態の人への「支援のアイデア」として、あまりにも的外れなので、ここでは論外とします。なぜ的外れなのかは、前々回から書いてきた文章を読み返してもらえばわかると思います。従って、ここでとりあげるのは後者のみとします。

彼らの心に不安や緊張が高まっていることはよくわかります。しかし、粗暴行為などの行動を起こす動因というものは、「○○できないから」「○○が伝わらないから」などという対象化された概念であることは、ほとんどありません。強度行動障害と言われるような状態像になるまで追い詰められてしまった人の場合は、なおさらのことです。例えば、新一という青年への食事支援について、支援チームが作ったマニュアルにより、食事をカラーボックスの決まった位置に置き、そのカラーボックスを居室の前の決まった場所に置く決めていたとします。ところが、ある日の食事においては、それを置いた位置がいつもより3cmほど左にずれていました。そして、新一はその時に、食事の入ったボックスが左に3cmほどずれていたことを理由に、食事を用意した職員を殴ったとします。実際に、このような苦情を口答で訴えてくる人というのは、決して珍しくありません。では、この職員がその話を傾聴し、彼の言うとおりの3cmのずれが起こらないように細心の注意を払っていれば、彼は暴れなくなるのかというと、そんなことはありません。3cmのずれが解消されれば、今度は3mmのずれがトリガーになるでしょう。あるいは、全く別の物音がトリガーになるかもしれません。その範囲は次々拡大されていくでしょう。この時、3cmずれていたとか、3mmずれていたとか、本人にとって想定外の物音がしたとか、そういった具体的な事件は、確かにトリガー（きっかけ）かもしれませんが、原因ではないと僕は思います。彼らの破壊的な行動というものの大本は、事件ではなく状況に対しての、心身の全体的反応であり状態です。その状態が基底にあり、そこに乗っかる形で事件に対する反応が起こります。暴れるという反応が出現するメカニズムの黒子は、差し当たって避けることのできない漠たる不安であると言っていいでしょう。つまり、その本体は「感情に振り回される」という心の動きなのです。

事件と状況との間には、明確な違いがあります。事件に対する反応というのは、例えば、誤って熱湯の中に指を入れてしまい、手を引っ込めるといふ脊髄反射のようなものです。主に不意打ちをくらったときの反応です。あるいは、脊髄反射ではなく神経伝達運動だったとしても、それは固着したイメージに基づいて暴れているのであり、あらかじめ対象化されている事件に対して用意されている反応の出現です。例えて言うならば、陸上競技の短距離走選手がピストルの音に合わせてスタートを切る瞬間の動きみたいなものです。

一方で、状況に対する反応というのは、その場の雰囲気（視覚・聴覚・触覚・固有覚・相手との関係性が醸し出す感覚など）に彼の心身が全般的に反応する形です。こちらは、同じスタートでも、10両編成の通勤電車が走り出すときのようなものです。モーターの

ついた車両がガタンと動き出すと、その前後の車両がゴトンと動き出し、さらにその前後の車両がガタンと動き出して、ようやく全体として走行し始める。どこへ向かうのか、速度を上げるのか下げるのか、急停車するののかは、ポイントの切り替えで方向を変えるのかなどの大きな流れは、運転手と車両との関係性、あるいは、その路線全体の運行状況と車両との関係性によります。

状況に対する反応の場合、問題となる行動を引き出す原因は何かというと、特性確認シートのコミュニケーション欄が示唆するような、情報の意味が「難しい」とか、意図が「分からない」とかではないと思います。実際には、難しかろうが分からなからうが、信頼に足る人が心離れずに存在していれば、彼らはその場面を乗り切れるようになります。先に述べた山本五十六的英知があれば、時間はかかっても、やがて難しくもなくなるし、分かるようになるでしょう。あるいは、どうしても難しくて分からなければ、直接的に援助をしてもらいつつ一緒に切り抜けるという方法だってあります。要するに援助者の存在次第だと敢えて言い切りたいと思います。先ほどの例を再度引っ張り出して説明するならば、電車の車両と運転手との関係がしっくりきていれば、その路線全体の運行状況が多少混乱しようとも、脱線などの事故を起こすことなく目的地に向かって走れるというものです。もちろん、そういう関係になるまでには時間は必要ですが、そんなことは人が人と付き合う上で当たり前のことです。

もうひとつ、事件に対して過度に反応しやすくなる要因があります。人間というものは、不安や緊張が高まると、『仮性感覚過敏』という状態になることがあります。それが反応を呼び出すトリガーになることはあると思います。この特性確認シートには、強度行動障害を起こしやすい自閉症の特性として『感覚が過敏または鈍麻』と書かれていますが、『仮性感覚過敏』は、これとは違う概念です。みなさんは、感覚過敏という言葉を目にしたことがあるくらい聞いたことがあるでしょう。しかし、僕がここに書いた『仮性感覚過敏』は、それとは出自が違い、森田療法(1919年に森田正馬によって創始された精神療法)で有名な森田正馬が提唱した概念です。森田によると、この過敏は、実際に感覚が鋭敏になるのではないと言います。誰もが感じている観念なり感覚なりに対して、われわれが注意を集中すれば、その感覚は鋭敏になり、そうして鋭敏になった感覚はさらにそこに注意を固着させ、この感覚と注意が相まって交互に作用することによりその感覚をますます強大にする。そういう精神過程を経て起こる過敏です。そして、その人が注意を向ける対象に執着して起こった自覚だとしています。(『新版 神経質の本態と療法』森田正馬著 2004/12/1 白揚社)僕はこれを、注意をロックしたり解除したりする機能の失調だと考えています。そしてこの失調は、特に、本人が合目的行動をとっていないときに起こりやすいものに違いないと思っています。逆に、仲間同士が一同に集まっているところに、彼が「私たちの1人」として入り、同じ目的や目標をもって何らかの作業に取り組んでいると、このような対象への執着(仮性感覚過敏)は起こりにくいはずで、それは、余計なことを気にしにくく、その場が共有する目的に集中しやすいからです。その場が共有する目的の達成を阻害する刺激については、凶と地で言うところの地の方に退くわけですが、これを逆側から見て「鈍麻だ」といえば鈍麻になります。しかし、場が共有する目的に応じて、その対象に集中するという注意機能が正常に働く状態を指して、とやかく言うことではないでしょう。

僕は森田療法を知っているわけではありませんから、それを看板に掲げるようにして訓練に使うようなことはしません。森田的英知を彼らとの付き合いの中に忍び込ませることは、常にといいほどしています。また、個人的には、前回触れた行動主義心理学についても、森田的英知を忍び込ませて使えば、その効果は大幅に上振れすると考えています。森田療法には、禅寺の住職と座禅をくみに来た人との関係みたいなものが漂っています。実は、この関係（座禅を完成させる共同作業）は、感情と密着せずに、さりとして無視しようともせずに、はからわず、心穏やかに動作を保つスキルを身に付けるための必須条件だと思います。この関係抜きに支援者だの利用者だのと言っているから、上手く行かないし味気ないものになってしまうのです。

状況に反応して荒れた行動を起こしてしまう彼らを苦しめているものの黒子が不安や不信だとすると、そこに一条の光を差し込むのが人間同士の善き関係性だと思います。これ抜きに、次に取りあげる③について「支援のアイデア」をひねり出そうとしている本研修は、僕に言わせると、子どもじみた荒唐無稽な物語のようなものです。

③やりとりが難しい

研修全体を通して言えることですが、この研修の特徴は、強度行動障害と言われるような状態になっている人への支援について、情報をいかに視覚的な形で伝えるかということにこだわっているところだと思います。根底には、人の行動をあまりにも単純化した思想があります。問題となる行動発生のメカニズムについて、「分からない」「難しい」から不安になる、不安になるから激しい問題行動を起こす、という狭い範囲内の垂直的因果関係に単純化して、一次元にまとめようという浅い考え方です。

僕は、この考え方については諸悪の根源だと確信しています。メカニズムが垂直的因果関係であることも、希にあるかもしれませんが、大半は、そんな単純な定式に当てはめて解決できるものではないだろうと思っています。この考え方は、③にも浸透しており、「場面や状況に合わせたコミュニケーションが難しい」「表情や視線などの非言語コミュニケーションが難しい」「やり取りの量が多いと処理が難しい」と、「難しい」のオンパレードになっています。そして、これに対する支援のアイデアはというと、①②と全く同じ。これを読めば、研修講師が彼らと付き合い込んだ経験のない支援者だということは明々白々です。

彼らは、付き合い込んだ人との間では、実によく場面や状況を読もうとするし、表情や視線や気配を伺います。やり取りの量が多いと処理が難しいのはご愛敬で、僕だって疲れているときは一回にひとつしか処理できません。そういうときは「お釈迦様じゃあるまいし…」と開き直るのがよろしい。ここまで書いてきたようなことを念頭に置きながら、すったもんだする援助者とともに人間関係の醍醐味を知った人は、強度行動障害の加算がついていようがいまいが、その関係の中に意味を見だし共感し合えるものです。不穏になっても、腹をくくって付き合ってくれる援助者が「ドッコイショ」と隣に座ると、鎮静剤の注射でも打ったかのように脈は下がり、呼吸は深くなり、肌の色艶も良くなります。混乱してほぐせない毛玉のかたまりみたいになっている人がいたら、まずはこのような関係になることを目指すのが僕らの任務でしょう。毛玉のかたまりがほぐれて、一緒に編み物でもできるようになることが、僕らの誇りと栄光なのです。もちろん、時間と労力は必

要ですが、そこは職業援助者の任務として割くのが当然です。でなければ、どこで給料をもらっているのかと言われるでしょう。手間のことしか考えない支援者を援助者という概念に含めることはできません。

そもそも、課題となっている行動（本人が困っている行動）が「やりとりが難しい」と言うのであれば、そのやり取りを先に述べたような中性的記号列のみでしていこうとするかのような支援のアイデアをあげつらっても、何ひとつ建設的なことはありません。やりとりするにあたっては、情動的・生物学的情報が記号性を含みこんで交わされるイメージをもたなければ、いつまで経っても「難しい」ままでしょう。それどころか、相手が中性的記号列としての単語なりセンテンスなりに固執してしまい、かえってやりとりにならなくなってしまうことすらあります。このことは、僕らが注意しなければいけないことの第一にあげてもいいくらいです。

はたして、強度行動障害というレッテルの根拠となる行動には、どんな意味があるのでしょうか。全くの推察ではありますが、僕はこう思います。ひとのことを殴ったり、自分の身体を自分で傷つけたりする行為というものは、その瞬間、心身が一纏まりになります。自己感覚を取り戻せるのです。そうやって、わざわざスリルを求めるといのは、一般に社会生活をしている人でもあることです。ただし、社会生活を継続できている人は、生活が破綻するようリスクを避けて、安全装置が機能する範囲でスリルを味わいます。例えば、遊園地でお化け屋敷に入ったり、ジェットコースターに乗ることなどは、そういう意味があると思います。これが、万引きをするとか、痴漢をするとか、賭博にはまるとか、そういった行為にのめり込むとなると、自身の人生がダメになるかどうかというスリルを求めることで自己感覚を取り戻そうとしているわけで、安全保障感がありません。こういったことを繰り返すと、徐々に安全保障感を放棄してでも行動化するという変な方向へ行ってしまう。彼らは、きっと不安の徴候を先取りして、そこから逃れるために破滅的な行動を起こし、無意識のうちに不安を後悔にひっくり返す作業をしているのだらうと思います。強度行動障害と言われるような粗暴行為や自傷行為についても、原理的には同じだと思います。

僕らはこれを、彼が前進しようとしてもがいていることの現れだにとらえることはできないでしょうか。そして、そんなことをしなくても、建設的な人生を送ることはできるのだよと教えるのが援助者の役割だという風に考えることはできないでしょうか。こういったことが神髄として内包されていれば、多くの方法（=方便）は有効に使えると思います。『特性確認シート』のアイデアについても、同様の文脈で考え直してみるべきでしょう。

どうやら、支援者養成研修に対する僕の批判は、神髄もなく方便をまくし立てているという状況への反応らしいということが、うっすらと見えてきました。引き続き、次回も『特性確認シート』の内容を検証していこうと思います。

つづく

令和6年4月16日

※ 支援ノートの文章は、事例として挙げられている人が特定されないように配慮されており、趣旨が変わらない範囲で名前や場所などの事実を加工してあります。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

3. 近況

【就労移行支援 ftlビジネス・スクール】 新規利用者募集中

知的発達症を含む神経発達症や精神疾患のあるかたたちが、実践的な環境で企業就労と社会参加に必要な心構えやスキルを身につけています。就職先とのマッチングは、利用期間中の体験的かつ実践的な経験を支援者と利用者として分かち合いながら行うことを目指します。

基礎訓練段階からのトレーニングが必要な方にも利用しやすい就労移行支援事業所です。療育的な視点で再評価し、個々にボトルネックになる課題を明確にすることで、具体的な傾向と対策を共有しながら就職に向けての援助を行います。

就職後にできるだけスムーズに職場定着できることを目標に、利用開始段階から多角的な評価と見立てをしっかりと行います。また、就職後には、継続して就労定着支援（通常3年半）を利用し、安定就労や自立に向けての援助や助言を受けることができます。

令和7年3月に特別支援学校高等部・高等学校・専門学校・大学などを卒業される方の利用枠もあります。

<http://www.ftl-1.co.jp/contact/>

【就労継続支援B型 ftlビー・ワーク】 お問い合わせください

当事業所は、じっくりと腰を据えて就職を目指す方を対象にしたB型運営をしています。長い目でみつつ企業就労を明確な目標にしている方が利用しています。ftl就労移行支援のクオリティーはそのままに、就労継続支援B型の制度を利用して就職と自立に向けての援助を行っています。

また、将来的にftlの就労移行支援を使いたいという方にもお勧めです。日中、社会的役割を得て仲間と共に働くということを中心に据えながら、生活リズムと様々なライフスキルを整え、張りのある生活ができるように、日々の援助をしていきます。

<http://www.ftl-1.co.jp/news/20220107/483/>

工賃収入を得て、社会参加していることを実感しながら過ごせる環境は、自尊心を下げることがを防ぎ、働き暮らすスキルと自信をつけます。

【発達保障型生活介護事業 ftlビー・ワーク】 見学可 実習については応相談

発達保障の理念を掲げ、社会参加の手段として『働くこと』をベースにした生活介護事業所です。利用者は皆、社会の中に役割を持ち、工賃も稼ぎます。糸賀一雄さんの言葉「こ

の子らを世の光に」を実践したいという想いと共に始まり、若々しいメンバーが、仲間意識を持ち、張り切って仕事に就いています。療育的な視点を持って成長発達を保障することを目的とした事業所です。基礎的な力がついた方については、就労移行支援や就労継続支援B型の現場で実習する機会を設けています。また、働くだけでなく、一体感を楽しみながらの仲間作り、生活技能習得プログラムや地域社会参加プログラムも実施しています。
<http://www.ftl-1.co.jp/lp/lifecare/>

【就労定着支援事業】ftlの事業所を通過した方のみ利用可

就労移行支援や就労継続支援を使った後に企業へと就職した方たちを対象にした、職場への定着支援事業です。人となりをつかんだ上での、テーラーメイドの就労定着支援です。
<https://1drv.ms/b/s!Ah7JHDWO-znfx3thUQpVzZLqFVL7?e=kVqNYL>

【計画相談支援 ftlアクセス】ftlの事業所を利用する方以外の受入は中止しております

児童・成人とも対象にしております。フォーマルな障害福祉サービスを使う方を対象に、サービス利用計画を作成したり、様々な生活相談に応じる支援を行います。

* 土曜プログラム・特別プログラムについて (ftlの就労移行支援・就労継続支援B型利用者が対象です)

土曜日に行われるプログラムです。以下が、プログラムの例になります。

① どだいの会 (身体感覚の発達・状況判断能力・社会性を発達させます)

社会適応の障害になり得る発達の凸凹や遅れは、脊椎を中心にした身体図式、身体の基本動作、感覚器の使用、記憶と操作、指示理解と把持などが大きな要素になって形成されます。どだいの会では、楽しみながら身体動作の状態を確認し、個別訓練メニューを考えたときのヒントとして現場へとフィードバックします。まさに、就労自立の土台になる活動です。

② ICT教室 (PC技能訓練)

WordやExcelの使用方法を中心に、基礎から学びます。あわせて、事務的な作業指示に対する理解度を確認し、傾向と対策をつかみます。働き始めたときに役立つ様に、メンバーの段階に合わせてプログラム設定を行います。

③ 「和太鼓講習」

市民グループ『富士見太鼓の会』様の稽古に参加しながら、和太鼓を楽しみ学びます。

<https://www.fujimitaiko.com/>

和太鼓の良さは次のような点にあります。

- 音階がなく、強弱とリズムで表現するため、わかりやすい
- 耳よりも身体全体で感じる音であるため、認識能力の差があっても共有しやすい。非言語コミュニケーション能力が育つ。
- アイコンタクトをとり、息を合わせて全員でひとつの曲を演奏するため、仲間との一体

感や、場を分かちあう感覚を楽しみながら得られる。

○腰を入れた動作を主としており、随意筋と不随意筋を協調させる運動である。

④専門講師による特別プログラム

就労自立を達成するために必要な知識をワーク形式で身につけていく場です。社会生活を維持するために不可欠な内容が中心になります。オープンな雰囲気、楽しく真剣に学びます。

スマホ依存やゲーム依存を予防する学習や、口腔ケアなどの健康管理に関する学習などを普段とは違った雰囲気の中で、楽しく学ぶことができます。

⑤“自立講座” “OBとの交流会” 等

就労自立生活の実際について、専門家や経験豊富な職員が、利用者の皆さんにわかりやすく説明します。OBとの交流会では、ftlから就職した先輩たちが、今活躍している職場や仕事の説明をしてくれます。それを題材に就職についての理解と意識を深める場になります。どれも、就労自立に向けての意欲や意識を高める大切な時間になります。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

4. メディア関係案内 (全て、全国の書店やインターネットから購入できます)

○『家族で支援する発達障害 自立した進学と就労を進める本』 高原浩 監修
河出書房新社

<https://www.kawade.co.jp/np/isbn/9784309254524/>

選択肢が増えたように見えて、実は問題点も多い進学と就労について、現実の課題をわかりやすく解説した上で、自立した選択ができるようになるための実践的な情報を伝えます。

○『現場発！知的・発達障害者の就労・自立支援』 高原浩 著 学事出版

<https://www.gakuji.co.jp/book/b10034370.html>

重版(3刷)好評発売中です。

○『飼い殺しさせないための支援』 高原浩 著 河出書房新社

***全国学校図書館協議会選定図書に選定されています。**

<http://ap27.eurotec.ne.jp/np/isbn/9784309248943/>

○『現場発！ソーシャル・インクルージョンとインクルージョン教育』 高原浩 著 学事出版

<https://www.gakuji.co.jp/book/b10034212.html>

著者の体験談を基に、ソーシャル・インクルージョンを障害福祉の現場から具体的に問い、インクルージョン教育を教育現場の実践者との対談を通じて考える本です。障害福祉の本質に迫ります。日本教育新聞の書評に掲載されています。

<https://www.kyoiku-press.com/post-211922/>

○ジョブメドレーアカデミー オンライン研修講師として登壇中(下記リンクは、案内のみです)

『個別支援計画と支援方針の立て方～就労支援編～』

『サービス管理責任者向け研修』

<https://jm-academy.jp/syogaifukushi>

○NPO法人 日本インクルーシブ教育研究所 多様な発想支援士養成講座

『対人援助のコツ ～非施設的实践の現場から～』

<https://x.gd/TaItY>

<https://www.jiei.org/tayounahassou/step4itoshi/#i1-3>

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

5. 研修・講演について

研修講師・講演のご依頼につきましては、直接お電話いただくか、メールまたは以下のお問い合わせフォームからどうぞ。

info@ftl-1.co.jp

<http://www.ftl-1.co.jp/>

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

令和6年4月16日

ftlビジネス・スクール/ftlビー・ワーク
施設長・サービス管理責任者 高原浩